

「成長ないと終わり」なのか

朝日新聞 2016年4月29日

—東京生まれで、神戸に拠点を置いていますね。

「東京より神戸のほうが好きです。街のサイズが適正なんです。東京は人が多すぎるし、情報というよりノイズがあふれている。バブル期の東京にうんざりして地方で仕事を探して、神戸に行き着いたとき、『ここは人間が住むところだ』と感じました」

—それでも、若者たちは東京をめざします。

「それは若者たちが客観的で精密な『格付け』を求めているからです。能力の高い若者ほど、同世代内での自分のランキングを知りたがる。100点満点で何点か。全体の何位か。それが知りたくて、ひとが多く集まる場所に突っ込んでいく。起業家も、ミュージシャンも、就活生も、動機は同じです」

「新卒一括採用なんて、企業が高い能力の労働者を低賃金で手に入れるために決めた一方的なルールなのに、学生は喜々として参加している。大手企業の選考に漏れた学生は自己評価を下方修正し、ブラック企業を受け入れる。互いの方向性が合致しているんです」

格付けに夢中

—確かに、なんでも点数化される世の中です。

ログイン前の続き「1960年代に偏差値というものが登場し、同学年何百万人の母集団で自分が何番目なのかが明示されるようになった。巨大集団内で競わせ、上位にはご褒美を与える仕組みが導入されたのは、それが始まりじゃないでしょうか」

「英語学習はTOEICやTOEFLの点数でクリアに格付けされ、入試や採用試験の結果も左右する。だからみんな夢中になる。日本の大学も、留学生受け入れ数や英語の授業数、外国人教員数などで『グローバル度』を格付けされる。大学教育の質なんて、本来は数値化できるはずがない。でも、ランクに従って資源分配され、下位校から順に淘汰(とうた)されるべきだと、みんな思い込んでいる」

—効率や合理性を重視する風潮が、東京一極集中を加速させています。

「人口減少社会で経済成長を望むのは不可能です。それでもなお成長をめざすとしたら一極集中しか策がない。政官財は、コストが少ない一極集中戦略で一致していると思います」

「国家ぐるみで成長をめざすシンガポールのような都市国家にする。農業のような非効率な産業セクターは切り捨てる。里山はインフラ整備にコストがかかるだけだから無人化する。地方の人口はコンパクトシティに集めて、消費活動だけに専念させる。エネルギーや食糧は外国から買う。都市部で貨幣収入がある人以外は生きられないという仕組みをつくれれば、人口が7千万~8千万人くらいまで減っても、もうしばらく経済成長を続けられるかもしれない」

—流れは止められないのでしょうか。

「流れを止めるためには経済成長をあきらめるしかない。右肩上がりの成長を求めるから、ひとたび事故を起こせば広大な土地が失われるような原発も必要とする。適正な規模の経済にどうソフトランディングさせるか、その具体的な手立てを考えるべきときに、日本人の過半は『成長が止まったら終わりだ』という思考停止に陥っている」

「人類7万年の歴史の中で、経済成長率が有意な数値になったのなんか、この100年のことです。欧州諸国もいまや軒並みゼロ成長・マイナス成長。経済成長率が高いのは、内戦などでインフラが破壊されている国ばかりです」

指標にない幸せ

—経済大国・日本が成長を捨てられますか。

「日本には豊かな水や肥沃(ひよく)な土地、動植物の多様性がある。貨幣経済に対するオルタナティブ(他の選択肢)があるんです。でも、いま日本人が進めているのは、このかけがえのない国民的なストックを破壊し、生きてゆく

上で必要なものはすべて貨幣によって市場で買うしかないというところに追い込むことです」

「確かに日本がいまの大量生産・大量流通・大量廃棄をやめれば、GDPは下がるでしょう。でも、経済指標に出てこない経済活動だって、実は盛んに行われている」

——数字に表れない経済とは、どんなものですか。

「政治学者の姜尚中さんは、平均所得が200万円以下で『日本一貧しい』とされる熊本県の村でも人々は豊かに暮らしていると言っています。そこでは都市部で買うしかない財やサービスが、物々交換で手に入る。貨幣経済だけが経済活動ではないし、所得だけで豊かさを格付けすることもできません」

「私は神戸で武道の道場を開いています。地域に住む門人約200人はここを場とする相互支援・相互扶助のネットワークを形成しています。活発に財やサービス、知識や技術の取引が行われていますけれど、貨幣は介在しない。自分が多めに所有しているものを差し出して、自分に足りないものを受け取る」

——福島避難者は、東京電力の原発事故で湧き水や山菜が失われたと嘆いています。

「そうしたものは東電による損害賠償の対象になりませんが、まさにストックです。きれいな湧き水や山菜がある自然を生み出すために、一体いくらお金がかかりますか。日本は他国に比べ、非常に豊かな蓄えを持っている。丁寧に使っていけば、成長なんかしなくても、今後何世代にもわたって幸せに暮らせるだけの蓄えが日本にはあります」

——成長をあきらめた場合、1千兆円超の国の借金はどうなるのでしょうか。

「払えないと、正直に言うしかない。海外からの借金は払うしかないが、日本人は帳消しにする。その代わりに、50年、100年後の日本人が幸せに暮らせる国家ビジョンを提示する。インフレになれば借金は相対的に縮むが、それが自然な経済活動かのように語るのは不誠実です」

(聞き手・伊藤弘毅)

うちだ・たつる

1950年、東京都生まれ。思想家（フランス現代思想）、神戸女学院大名誉教授。75年に東大文学部を卒業し、82年に東京都立大院人文科学研究科博士課程を中退。神戸女学院大教授などを務めた。合気道七段で、道場「凱風館（がいふうかん）」館長。07年に著書「私家版・ユダヤ文化論」（文芸春秋）で小林秀雄賞を受賞。